

簡単な愛撫、または、すごい焦らし

海斗の平らに伸ばされた手のひらは、少し浮き上がって、突起した部分にだけ触れ、

「の」の字を描くように動かした。みさきは、自分の乳首が今まで経験したことのないほど勃起しているのを感じる。

先端を撫でられ、甘い吐息をもらった。

「あ、あつ、あつ」

「なんか変なの。ずっとくつつきたかった。」

「欲求不満だった？」

「そんなじゃないけど」

みさきはすぐにでもパジャマをはだけて、固くなった乳首を直接触ってほしかった。

しかし、海斗の手は、パジャマの裾から滑り込んできたりせず、ゆっくりとボタンを外し始める。

ボタンが一つずつ上から順番に外される。みさきはその手の動きを眺めながらもどかしさを感じ、また、ボタンが外されるたびに昂ぶっていくのを感じた。

海斗の右手は全てのボタンを外し終えると、二枚の布地の間に手を差し入れた。海斗の手は暖かかった。初めはおへソを塞ぐように乗って、体温を伝え合う。

暖かく、すべすべした肌で撫でられるのは気持ちがいい。

手は、そこからだんだんに上がっていき、胸の膨らみに到達すると、手の平はその丸みに合わせるようにして包み込んだ。

海斗は乳首の位置を確認すと、親指と人差し指で、小さな粘土で球体と作るような柔らかなタッチで何度もつまんだ。位置を変えながら形を整える。

みさきは顎を引いて口をつぐんでいたせいで声が出せなかった。

「ンツ、ンツ、ンツ」つままれるたびに鼻に抜ける。その音と鼻息は声を出すよりもイヤらしいとみさきには思えた。

海斗の部屋はそれなりの大きさなので、きつとここで大きな声を出しても近隣には聞こえないだろう。みさきはそれを知ってはいたが、大きな声を出すのが下品な気がして、いつも声を押さえている。

しかし、鼻にかかったたくぐもった喘ぎ声や、我慢しきれずに口の端から漏れる小刻みな吐息のほうで、「もっと強く、深く」と自分から誘っているように聞こえて恥ずかしかった。

